

趣旨説明

川島啓二

国立教育政策研究所

最初に私から、今日のシンポジウム全体の趣旨をご説明します。

初年次教育は、英語で First-Year Experience と言うように、学生の経験、体験が鍵を握ります。正課の活動だけでなく、正課外の活動をも含めた経験、体験、いわば学士課程全体を通じての経験、体験が重要なのです。近年は、学生支援についても関心が高まり、その方法について知見が重ねられてきています。

今日は、学生支援の具体的な知見に関する二つの事例を通して、初年次における経験、体験が学生にいかにか大きな成長をもたらすかを、皆様とともに見ていきたいと思えます。学生支援を充実させるためには、教員だけでも職員だけでもなく、教員と職員が力を合わせる事が大切です。そうした思いを込めて、大会シンポジウムのテーマに「教職協働」を加えました。

今大会は、初年次教育学会の理事が在籍しない大学を大会校として開催される、初めての大会です。この日に向けて実行委員会を開くこと 11 回、テーマについても事例についても、侃々諤々たる議論が重ねられました。大会校である文京学院大学の皆様には、これまでの取り組みを振り返り、まとめていただきました。その結晶が、今日の発表です。

さて、シンポジウムと言いますと、その道の大家が集まって話すというスタイルを思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか。もちろん、そうしたシンポジウムによって得られる知見はたくさんあります。ただ、目の前にある課題を考えるためには当事者の声に耳を傾ける必要があるはずで、そこで、今日のシンポジウムには、実際に初年次教育に取り組んでいる大学の教職員の方をお招きしました。学生と日々向き合い、さまざまな取り組みを行っている方ばかりですから、事例の発表でもパネルディスカッションでも、初年次教育、学生支援、そして教職協働のリアルな姿が浮かび上がるに違いないと考えています。

会場の皆様には、ぜひ忌憚のないご意見をいただきたいと思えます。